

天然薬物研究方法論アカデミー 第16回 シンポジウム

主催者 天然薬物研究方法論アカデミー
日時 平成25年8月24日～25日
場所 岐阜グランドホテル

目的と概略

天然薬物研究方法論アカデミーは 1985 年に結成された血清薬理研究会を前身とし、小橋恭一先生、荻原幸夫先生、横山照由先生、田代眞一先生によって 1995 年に組織された研究会であり、天然薬物、漢方薬、サプリメント等に関する研究方法論の確立を目標にシンポジウムを開催してきた。天然薬物、漢方薬、サプリメント等の薬理活性、臨床効果の評価には、多成分系であるがゆえに、信頼性を確保するための対応が求められるが、有効成分の同定が困難である場合においても、多成分系としての天然物の有効性を確立するとともに、品質を確保することが信頼性を高めるためには極めて重要と考えられる。天然薬物の研究および応用に関わるこれらの課題はこれまで繰り返し取り上げられ、議論されてきたと思われるが、本シンポジウムでは再度この課題を取り上げ、「天然薬物研究の質を確保するために」を主題とし、議論を深めることによって、天然薬物研究の成果の信頼性向上に寄与することを目的とした。

本シンポジウムでは第 1 日目の午後および第 2 日目の午前に、特別講演 2 題、シンポジウム 2 題を、第 1 日目夜にナイトセミナーを企画した。79 名の基礎、臨床の研究者、医療従事者等の参加を得ることができ、活発な討論の場を提供することができたと考えている。

シンポジウム 1 では、第一線で活躍されている基礎研究者 4 名に興味深い研究成果とともに、成績の信頼性を高めるために配慮されていることを紹介していただいた。また、シンポジウム 2 では、漢方の臨床に携わっておられる 3 名の先生に、漢方薬の臨床試験、症例報告の重要性、小児漢方治療の問題点についてご講演いただいた。特別講演では、天然薬物資源の確保に関する講演、および天然薬物研究で得られた成績を報告する際に求められる情報についての講演をお願いした。さらに、ナイトセミナーではウサギの皮膚に由来するノイロトロピンの品質管理、作用機序解析などについて解説していただいた。

いずれの企画においても活発な意見交換ができたことから、企画は適切であり、シンポジウムの目的を概ね達したものと考えている。しかしながら、本シンポジウムの主題「天然薬物研究の質を確保するために」については、簡単に結論を得ることができる課題ではなく、継続して検討することが必要であることを再認識した。

プログラム

特別講演1 田中宏幸 九州大学大学院薬学研究院 薬用資源制御学分野)

シンポジウム 1 「天然薬物基礎研究の信頼性を高めるために」

磯濱洋一郎 東京理科大学薬学部 応用薬理学

清原寛章 北里大学 北里生命科学研究所 東洋医学総合研究所

堀江俊治 城西国際大学薬学部 薬理学

和田政裕 城西大学薬学部 医療栄養学科・薬科学科

ナイトセミナー 内木 充 日本臓器製薬株式会社 生物活性科学研究所 薬理研究部

シンポジウム 2 「漢方臨床研究の信頼性を高めるための課題」

若杉安希乃 北里大学 東洋医学総合研究所 EBM センター

伊藤隆 鹿島労災病院 メンタルヘルス・和漢診療センター

山口英明 公立陶生病院 小児科・漢方外来

特別講演 2 松本欣三 富山大学 和漢医薬学総合研究所 複合薬物薬理学分野

参加者数

研究所:3名, 他部局:0名, 学外:76名

和漢医薬学の科学的基盤形成および関連研究者コミュニティ形成への貢献

天然薬物研究では天然物そのものあるいは天然物から調製した抽出物を対象とする。したがって、対象には無数の成分が含まれることとなり、その評価には注意が必要となる。天然薬物の基礎研究における再現性、信頼性の高い成績、臨床応用における安定した治療成績には品質が一定に管理されていることが前提であるが、多成分系であるため、厳密な品質管理は難しく、特定の成分についてのみ評価されることが多い。このような状況の中、いかに天然薬物に対する信頼性を高めていくか、その科学的方法論を探ることが天然薬物研究方法論アカデミーの設立時からの課題であり、これを共通の課題として再度認識することが重要である。

天然薬物研究方法論アカデミーではこの課題に取り組み、年 1 回シンポジウムを開催してきた。最近では 100 名ほどの基礎、臨床の研究者、医療従事者等が議論に参加してきた。開催地およびその近隣からの参加者が主体であるが、遠方からの参加もあり、小規模ながら、役員を中心としたコミュニティが形成されていると考えられる。今回のシンポジウムでは、愛知、岐阜からの参加者が主体であったが、シンポジウムの趣旨を十分にアピールすることができ、コミュニティ形成にも一定の貢献をなし得たと考える。いずれの講演に対しても活発な議論があったことから、話題の設定も適切であったと思われる。また、役員の増員も行っており、コミュニティの拡大が図られた。本シンポジウムでは、名古屋市立大学薬学部、名城大学薬学部の先生方のお力添えをいただいたが、今後とも連携を深めていきたいと考えている。

天然薬物あるいは漢方薬の研究、臨床応用においては、コミュニティの形成と拡大は極めて重要と考えられる。長い歴史を有する漢方薬においても日々信頼性が高められてきているとは言いがたい。これまでのアプローチに加え、さらに一歩踏み込んだ取り組みが必要と思われる。